



ヒメネズミ

鑑別目 ネズミ科に分類される頭胴長10㎝、尾長も10㎝ほどの小型のネズミである。本州・四国・九州などの平地から2,000 mに近い山間部の山林に生息する。地下道を掘り、木登りをし、時に人家に入ると図鑑には書かれている。昆虫や植物の種子を主食として、3～9月の間に1～2回、1～6子を産み寿命は1年と言われている。

1)ハンザキ研の荷を整理していたときに、廊下を黒い小さな影が走った。昆虫標本や蔵書を置かれたらかなわないと、ネズミ・ホイホイを仕掛けておいたところ3匹が掛かった。早速、小型哺乳類の研究者である三重県教育委員会の清水善吉さんに標本を送って同定して頂いた。1年ほど蔵書類を収容していたガレージでは、ハツカネズミに散々な目にあっていたので一安心した。教室の一つに置かれていた火鉢の底に数個体分の骨格標本になっているサンプルも手に入れた。火鉢のカーブとオーバーハングしている手すりがネズミの脱出を妨げていて、いいネズミ取りになっていたようだ。

2)校舎の玄関の扉の下にクリの皮が散乱していた。ドアの下の隙間は15㎝で、ネズミはくぐれてもクリは通過させれなかったのだろう。そこでは隙間塞ぎを夕方設置したが、それでも小忍者は相変わらず夜の研究室内で活躍している。道具入れの引出しの直径20㎝の穴から中へ入り種の皮を散乱させている。修理するために置いてあった調査用具のエンビのパイプ（内径23㎝）を持ち上げたら中からオレンジや柿のタネがバラバラと出てきた。折角のストック場であったのだろうが、調査に使わねばならない。

3)しばらく振りにハンザキ研に来たら、床に小さな黒いフンが点々とあり、昆虫の羽がいくつか所にまとまっていた。そして、仕掛けておいたゴキブリ・ホイホイが無残な姿となっていたのである。上側の1/3位が細かくかみ砕かれて散っていた。よく見ると、ホイホイの底に直径3㎝位の広さに毛が張りついている。もがいてもがいて必死で脱出したのであろう。それからしばらくは音沙汰が無かったが、また最近になって足元を走り去っていったのがある。かなり密閉性の高い建物だと思うのだが、一体どこから侵入してくるのだろうか？ 庭に設置したコンポストの中にも小さなトンネルが開いていたが、ヒメネズミの物ではないかと思う。天井を走る音がするので、下から天井をゴンゴンさせても一向に足音は止まらず、蓄められているようだ。小忍者との知恵比べは当分続きそうである。

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて(2) — ハジカミイヲ(ウヲ)
NPO 法人 地域再生研究センター会員
日本ハンザキ研究所 研究員 池上 優 —

まずは、現在使われている「オオサンショウウオ」という呼び名が、過去においてはどのようなものであったのか、既存の資料などの引用から話を始めます。

我が国におけるオオサンショウウオの文献や資料等を編集した書物として、「日本ハンザキ集覧」(生駒義博 編 津山科学教育博物館 1973)という著名な書物があります。この書物の英文題は“GIANT SALAMANDER IN JAPAN”で、直訳すると「日本の大型サンショウウオ(あるいは大サンショウウオ)」です。

この本では大きく三つの時代の文献・資料を紹介しています。目次を見ると、<古典(本草書)の部>として、本草和名(深江輔仁 918年頃)から和漢三才図会(寺島良安 1712年)の間の11件の古典をあげています。また、<古典学術書の部>では7件の資料(1823~1904年)をあげ、表題では外国文をハンザキと訳し、全てはんざき又はハンザキという日本語を用いています。そして、<近代学術書の部>で、16件の資料(1930~1973年)を紹介していますが、表題の用語には、はんざき、ハンザキ、大山椒魚(山椒魚)、オオサンショウウオなどが出てきています。ハンザキという呼び名については、後続号で触れます。

オオサンショウウオの仲間は、現在、日本、中国そして米国の一部に点在するのみで、各々異なった種であるとされています。そして日本産のものは、<和名>オオサンショウウオ<学名> *Andrias japonicus* <英語名> Japanese giant salamander で、動物分類学上は、両生綱 有尾目 オオサンショウウオ科 オオサンショウウオです。余談ですが、中国産は、<和名>チュウゴクオオサンショウウオ、<学名> *Andrias davidianus* 中国語で大鯢とか娃娃魚とされているようです。また、米国産は<和名>アメリカオオサンショウウオ(ヘルベルダー)、<学名> *Cryptobranchus alleganiensis*、<英名> Hellberder ですが、2亜種が知られています。

では、先出の古典(本草学)を含め、日本の最も古い記録では、どのような名称が用いられていたのかを見ます。

平安時代初期(918年とされている)醍醐天皇の侍医であった深江輔仁(すけひと)が著し、江戸時代に発見され校正出版された「本草和名(ほんぞうわみょう)」がまず最初とされています。これは、中国唐代における本草学(人の薬となる動植物に関する学問)の主流「新修本草」(陶弘景)で、本草の漢名を和名に訳した日本最古の本草辞典です。

この中で、オオサンショウウオについて、「①鰻鱺魚、②鱸、③鮠魚」の漢字を和名で全て「波之加美以乎(ハジカミイオ)」と訳しています。しかし現在、①はウナギ、②はドジョウとされ、③がオオサンショウウオのことを指すとされています。ここで注目されるのは、オオサンショウウオのことを日本では、当時ハジカミイヲ(ウヲ)と呼んでいたということです。

続いて、931年に源順(みなもとのしたごう)が、百科事典の類として著した「和名類聚鈔」であり、「鰻鱺魚、鰻鱺」の漢字を和名で「波之加美以乎」としていますが、誤解ではないとも言われています。このハジカミイオ(ウヲ)の呼び方は、鎌倉初期までは

よく出てきていますが、それ以降はあまり使われなくなっています。

上野益三著「日本博物史」(1983年 平凡社)には、もう少し古い時代の記録が整理されています。それによると、「日本書紀」の619年の記録に「摂津(現在の兵庫南東部及び大阪北部)の国の漁師が堀江に網をかけたところ、小児のようで魚でも人でもない奇妙なものが入った。」とあり、著者は「これは、ハンザキ(オオサンショウウオ)であろうか。」と注釈しています。さらに、「日本後紀」の797年の記録に「宮中(平安京)の溝に、1尺6寸の大きさの魚がいたが、形がおかしい。深山山中にいる椒魚か。」とあり、著者は「ハンザキの記録か」と注釈しています。

ほぼ同時代に藤原基経が著し、江戸中期に出版となった「文徳実録(もんとくじつろく)」には、「852年に近江の国で形が猿に似た魚が採れたので献上したところ、老人達は、これは椒魚であり、昔見たことがある。」と書かれています。

ここで、椒魚という呼び名が出てきますが、「椒」は、「さんしょう、すなわち山椒」のことです。縄文時代の遺跡から山椒の入った土器が発見されたという話もあり(Wikipediaより)、日本最古の香辛料とされ、古名「はじかみ」とも呼ばれていました。

生姜(薑)が中国から伝来すると(伝来は3世紀以前と言われており、3世紀後半の魏志倭人伝に、倭の国の産物として、薑と山椒の記述がある)、生姜が「くれはじかみ」、山椒は「なるはじかみ」と区別されるようになり、その後「はじかみ」の名は生姜に取られ、山椒は「さんしょう」となり、現在では、はじかみと言えば、旅先の食事で焼き魚等に添えられる生姜以外想像つかないぐらい山椒とは隔たった感があります。

それでは、オオサンショウウオがハジカミすなわち山椒とどのような経緯で結びついていったのでしょうか。

江戸中期以降は、多くの学者が本草学辞書などに関する解説付の本を著しています。その中で最も著名な小野蘭山は「本草綱目啓蒙」で、名前に関する諸説をまとめています。その中から、関係ありそうな部分を抜粋してみます。「・・・背上皮色沙喫(ナマコ)及蝦蟇(クソガエル)ニ似て黒斑アリ、斑大ナル者小ナル者アリ、頭ニ近クシテ疙瘩(イボ)アリ、椒樹皮ニ似タリ、故ニサンシャウウヲト名ク、或云、椒氣アル故に名ヅク、又云、椒樹皮ヲ食フ故ニ名ヅク、・・・」すなわち、①頭付近のイボイボが山椒の樹皮に似ているから、②山椒の匂いがするから、③山椒の樹皮を食べるから、と3つの理由を挙げています。これらの諸説は多くの著者が引用しています。このうち、③はあり得ないにしても、②について、現地調査の経験者の方々は「そんな匂いはしない」と言われるので違うようです。私個人としては山椒の樹皮がそっくりであり、①が正論であると思いますが、碓井益雄著の「イモリと山椒魚の博物誌」(1993年 工作舎)の中で、北大路魯山人の「魯山人の料理王国」の一文「・・・腹を裂いたとたんに、山椒の匂いがブンとした。・・・」が紹介されていて、かなり昔から食用にされていたならば(現在は違法行為ですが)、②はこのことに関係あるようにも思われます。他には、サンショウウオ科のものが山で生まれ育つ故に山生魚という説などもあります。

いずれにせよ、山椒と生姜の呼び名の変化と連動して「ハジカミイヲ(ウヲ)」の呼び名が「サンショウウオ」という呼び名に移行していったものと思われる。(続く)

河川環境観察施設・助成金を受けての工事

II.

素人なので図面を見せられても、実際に出来上がった姿を想像しがたい。こちらの意図するところは十分に説明したので、大丈夫だろうと安心していると中々そうはいかない。幸いなことに、1月からの工事期間中は長期滞在が出来たので、進行する工事について現場監督にあれこれと質問したり余分な工事をしてもらった。ギリギリの経費で実施しているのに迷惑なことだっただろう。それでも無理強いする事はなく、やれる範囲でやってもらうと共に、こちらも便宜を図ってあげてのやり取りである。例えば、護岸を掘り込んだ土の活用で校庭に山ピオトープを作ったことなどである。観察用の人工巣穴に伏流水を導くべく後背部に配管を入れたが湧き水が予想に反して出なかった。仕方なく河川からの水を導くべくパイプに集水孔を開けてもらった。

また、平面図を見ると巣穴の中央に線が入れているので、当然2室になるものとばかり思い込んでいたら、それは蓋を支えるための梁だけであったのだ。結果としては1室分のエリアに椅子を置いて他室の産卵エリアを目の前にする事ができることになったので、うまく行けば今秋の産卵期には間近に見ることが出来るかもしれない。さてどうなることでしょうかお楽しみといったところです。巣穴の中を横から観察できるようにとガラス窓と雨戸が設計されていると思い込んでいたら、それぞれのスリットが有るのに、窓ガラスの亚克力板だけで雨戸は付いていなかった。仕方なく、自家工事で雨戸を作り付けたが、作業中に天蓋の鉄板が右手親指の上に落下してきた。指が潰れたかと思ったが、痛みを我慢しつつ動かしてみるとその気配は無かったのでヤレヤレということであった。

目下の状況では、湧水状態での低い水位で巣穴、はんざきブロック共に丁度いい状況である。梅雨や台風シーズンの増水期には一体どうなることやらと思いやられる。河川が左カーブする場所で左岸側に堆積していた土砂の動きや、下流にあった堰が完全に壊れると河底の低下が起こるだろうといった、今後の一年間の河川の動態を見ながら、フォローしていかなばならないだろう。

しかし、丸石河原がある河川敷へのアプローチ階段ができ、子供たちが座って話を聞くことが出来る雑壇、そしてオオサンショウウオの産卵観察巣穴ができたことで、今後の環境学習活動に大きな力となるだろう。自然の河川を人間が改変を加えていくのであり、机上で考えていたと通りに進むことは、難しいことだろう。継続的な観察をしつつ、改良を加えていき良い観察施設にしていきたいと思っている。石ころだらけの工事完了現場であるが、ネコヤナギなどの植え込み(挿し木)をおこなって、緑豊かな観察ステーションに仕上げていきたいと思っている。オオサンショウウオのための産卵巣穴ではあるが、産卵が行われなくとも、工事後の通水翌日にはタカハヤの幼魚が出入りしており、水生昆虫の羽化した殻も見られる。河岸における横穴の存在が、水生動物にとっていかに必要であるかを物語ったている。今後が楽しみなステーションの出現である。



写真2 火鉢のトラップ (5白骨死体)

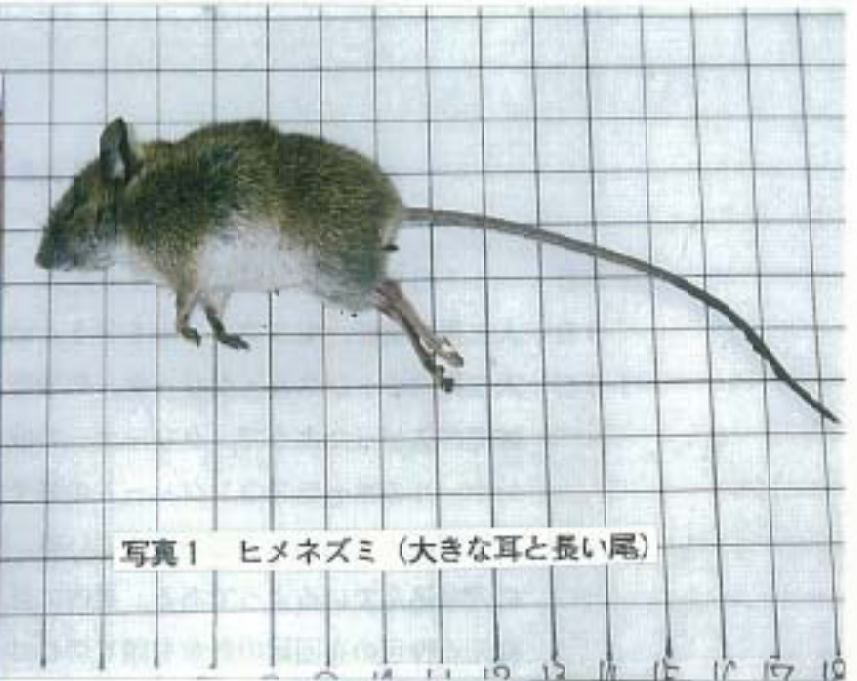


写真1 ヒメネズミ (大きな耳と長い尾)



写真3 ゴキブリ・ホイホイ脱出跡



写真4 内径23mmのパイプにストックしたタネ



写真-5 山椒の木(直径5cm)の樹皮



写真-6 生姜「岡山の薬草」(山陽新聞社)より

ハンザキ研日誌 2007年1月

- 6日：～12日まで調査（GS-226）
- 9日：人工巣穴調査，№3でオス№625と幼生を確認する
- 10日：人工巣穴のトンネル・クリーナーの改造（1本のヒューム管2本のつなぎ目の隙間が広がったようで，クリーナーの板がひっかって取れなくなる。また，マンホールのポーラスコンクリートの強度が弱かったようで，最下段が破損してオス親が入り込める空間ができています。幼生の大部分もそこから周囲の石の間に入り込んでいるようである。巣内に見える幼生の数が少ない。マンホールを抑える役目の布団籠の針金も錆で切れはじめる。13年の歳月で老朽化してきたようだ。
- 14日：～19日まで調査（GS-227）
- 15日：自然環境研究センターから戸田・中島両氏来所，オオサンショウウオに関するヒヤリング，2008年のサイテス附属書見直し会議に向けて資料蒐集のため
- 17日：朝来市の旧4町役場の余剰備品類の最終搬入，収容建造物の取壊し工事開始
- 26日：第20回揖保川流域委員会開催・たつの市青少年館ホールにて
- 27日：～31日まで調査（GS-228）黒主にニア・ミス個体あり
- 29日：兵庫県八鹿土木事務所朝来事業所より，生野町市川（竹原野地区）委員会検討
：朝来市山東町オオサンショウウオの会の藤本会長来所，ハンザキ研の視察など
：兵庫県但馬県民局県民運動課・田中課長他来所，地域活性化活動の状況視察
- 31日：兵庫県八鹿土木事務所・生野町市川（竹原野地区）委員会開催
現地視察と委員会の設立

今月は3回18日間の出勤？で，合計70人の利用がありました。

開所以来41回212日間，総計1,146人となりました。

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

昨年1月には融雪洪水の予報が出て見学に来たりしていたが，今冬のポカポカ陽気では全く面影がない。それよりも，雨もほとんど降らないので流れが弱く，大量の落葉がアンコ淵に堆積している。今月中旬の産卵巣穴からの幼生の分散の確認をしたいと思っているのだが，この膨大な落葉溜まりを見ると踏ん切りがつかず手を付けがたい。などと言いつつながら日が過ぎていくので，とりあえず人工巣穴だけでもと自転車10分ほど下流へ出かけたが，巣穴内にはオスと幼生がまだ居すわっていた。巣穴から川の中に幼生たちが出てくる切っ掛けは何なんだろうか？ 巣穴の出入口とおぼしき場所で集団で真っ黒な4～5羽の幼生たちが，かたまっていたり水中に垂れた植物の中にいたりするのだが。